慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	青年學生の精神的構造：青年學生の宗教(その一)
Sub Title	
Author	西谷, 謙堂(Nishitani, Kendo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1944
Jtitle	哲學 No.25/26 (1944. 6) ,p.22- 85
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	船田三郎教授還暦記念特輯
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000025-0022

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

青年學生の精神的構造

——青年學生の宗教（その一）——

西谷謙堂

一　問題提出

屢〻筆者を訪れる學生達の一人が、ある時自己（家庭を含めて）の一切を語り、最後に「郷里の中學を出て上京し、浪人の一年を送り、こゝに入學することが出來た。そこで未來の希望に燃え、高遠な理想を抱いて通學した。それと同時に哲學、思想に關する書物を讀み始めた。然し段々と日が經つにつれて、教室や讀書は、たゞ僕を知識の未知な領域へ導いて呉れるだけで、必ずしも、如何に生くべきかの具體的方法を與へて呉れないことを知り、何んとなく憂鬱な氣分に惱んでゐた。さうこうしてゐる中に友達に勸められて小説や傳記を讀むやうになり、逐次ゲエテやドストエフスキー等を讀むやうになつてからは、偉大な小説や傳記は最も優れた人生指導者だと思へた。それで

もやはりそれらをそのまゝ生活の規範として遵奉する氣持にもなれなかつた。最後にある知名な佛教家の許に走つて說敎を聞いた。聞いてゐる中は、感激を覺えたが、その尊い說敎も遂に行動に表現されずに消えてしまつた……」とつくづく告白した。

學生一般がこの學生の如く、價値への憧憬を持ち、價値の探究、生活の探究に惱むとは限らないであらう。彼等の中には尙深く穿鑿することも、反省することもなく、無批判的にその生を享受してゐる者もあらうが、可なり多數の學生は夫々共通な並に獨自の煩悶の日々を送つてゐるであらう。抑〻青年は外部に向つては己れを閉鎖し、己れの體驗を示さず、自分自身の中に隱遁しようとする傾向（「心の內の生活」）を有つてゐる。かくして青年の煩悶は外部から容易に鑑定し得ないのではないかと考へられる。

勿論青年時代は、シュトルム・ウント・ドランクの言葉を以て象徵されてゐる程に、强烈なる感情の發現する時代である。從つて青年は容易に感激に浸り又感傷に陷り、動搖する氣分的生活を營む。ツィーエンの言葉を使用すれば、(一)この時代は「哲學的陶醉」の時代である。また青年は虛榮心が强く煩悶を言語的に誇張して表現せんとする傾向をも有たぬではない。まさしくそれらの理由を以て、又は青年に必然的に發現する一種の熱病として更には單なる神經衰弱的徵候として青年の訴

を、恰も解剖學者が死體を解剖する場合の如く冷遇することは、忍び難きことであらう。

蓋て人間の現實的存在は、遺傳的素質と物的環境（風土）並に歴史に規定された社會文化的環境との輻合の所產である。而もこの二種の環境が極めて重要なる因子であることに對しては疑ふべからざる幾多の事實がある。今日の如き世界史的轉換の時期に於ては、生活のあらゆる面がその方向を轉換する。特に青年學生は學業半ばに或は學業を了るや直に祖國防衛の第一線に立つ必然性を有つてゐる。かくの如き時代の一般的構造と社會的環境の構造とが青年學生の精神的構造に深刻なる影響を與ふることは蓋し想像に難くないであらう。

かくして筆者は青年學生の精神的構造を種々の面から探らうとして、先づ宗教の問題を取り上げた。而してこの問題を取扱ふ爲には、豫め宗教の本質、宗教的意識の意味を明かにして置くことが必要であるが、筆者はこゝに於ては寧ろ青年學生の意識に存する宗教のさながらの相を探らうとしたのである。

（註）

（一）Th. Ziehen : Das Seelenleben der Jugendlichen, 1927, S. 56.

二　方　法

前節に於て述べた如く、青年は「內閉的」性格を有するが、たゞそれに止らず自我を發見し、この自我に向つて堀りさげて行く。從つて青年には自己觀察、自己評價、自己形成の時期が次ぎ次ぎに現れ、遂に己れを表現せんとする熱望によつて、自己敍述が現れてくると一般に考へられてゐる。故に適當な方法を以てさへすれば、その魂の眞相が把握されるであらう。

フォルケルトは青年心理學に關する極めて包括的にして綜合的な方法を提示してゐる。(二) シュプランガア (E. Spranger)、トゥムリルッ (O. Tumliry)、シャーロッテ・ビュウラア (Ch. Bühler) 等が傳記、作文、日記、自敍傳等を素材として青年の心の洞察に精進してゐることは一般に知られてゐる通りである。エーリッヒ・シュテルンは「青年は自分の內心に生起するもの、念頭を去らざるものを報告しようとは容易にしないものである。寧ろ青年は自分自身の中に退き而して最も內面的なるものを世の人々に閉ざさうとする。……それ故にウムフラーゲン、質問紙及びこれらと類似の他の方法は何等本質的洞見を與へないであらう。……他面青年には自分自身の體驗を日記、手紙、詩に於て表現しようとする傾向がある。かくして今述べた如き記錄及び藝術的表現の試作は極

めて重要なる一資料となる……青年心理學に對する最も本質的な方法は、如何なる場合に於ても、觀察と青年の心に直接に同化することとである」(二)と述べてゐる。更にクプキイは「成人に對して青年は、まさしく宗教的並に世界觀的問題に於て多くは非常に用心深く而して沈默的である。青年はたゞ同年輩の友人にのみ自ら信じてゐること及び考へてゐることを話すものである。然し多くの青年は自己の確信を日記には腹臓なく記載するのである。故に青年時代の宗教及び世界觀を精密に追究せんと欲する場合には、日記を最も價値ある資料と私は考へてゐる」(三)と述べ、日記の價値を强調してゐる。

方法論の論議は他の機會に讓り、筆者はこの問題に對し種々の方法（例へば作文法、聯想法等）を併用しようと考へてゐるが、先づ烏瞰圖を得る爲に質問紙法によることとした。卽ち右記の如き質問紙を各被驗者に配布し之が筆答を求めた。各被驗者は極めて自由に、卒直に、眞面目に調査に協力して呉れたものと判斷された。但し調査終了後「質問は却々むづかしく非常に困つた」と筆者に訴へ出た被驗者の有つたことは、調査項目及び表現などに更に考慮すべきものあることを示唆してゐると思ふ。

備　考（Ⅰ）これは思想調査ではありません。從つて次の質問に答ふることにより，あなたは決して不利益を得ることがありませんから，どうぞ自由な氣持で卒直に眞面目に答へて下さい。

（Ⅱ）★印のある項目に於ては，あなたに適當してゐるものに，○印を附けて下さい。

學　部　　學　年　　クラス　　姓　名　　滿年月　　出身校

家庭の職業

★家庭の宗教　　神　道　　佛　教　　キリスト教　　その他の宗教

永　住　地　（府縣別）

★健康狀態　　甲　　乙　　丙

★Ⅰ　あなたは神様（佛様）の存在を信じてゐますか。　　然，　　否

Ⅱ　もし信じてゐないならばその理由を述べて下さい。

Ⅲ　もし信じてゐるならば

a.　それは何といふ神様（佛様）ですか。

b.　それはどんな形態と個性とを有つてゐますか。

c.　その存在の信仰は

1.　あなたの推理（そしてそれはどんな推理）の結果から生じたものですか。

2.　あなた自らの體驗（そしてそれはどんな體驗）から生じたものですか。

3.　他人に敎へられた結果から生じたものですか。

4.　家庭等の周圍（そしてそれはどんな周圍）の感化から自然に生じたものですか。

5.　其　　他

d. 1.　神様（佛様）が存在すると考へた方が，あなたの生活態度を安益ならしむるといふ理由の爲ですか。

2. もし神樣（佛樣）の存在を信じなければ，あなたの生活に何か變つたことが起りさうに思へますか。そしてそれはどんな變事ですか。

3. あなたは他人の無神論を快く承認することが出來ますか。

e. あなたは機會ある毎に神樣（佛樣）に禮拜してゐますか。　　然，　　否

f. もし禮拜してゐなければその理由を述べて下さい。

g. もし禮拜してゐるならば，

1. 自發的にですか。そしてそれは何かを求むる心からですか，或は禮拜すべきものなるが故からですか。

2. 他より强ひられてですか。

3. 習慣上からですか。

4. 其　　他。

★Ⅳ あなたは宗教に就いて關心を有つて居ますか。　　然，　　否

Ⅴ もし有つてゐないならばその理由を述べて下さい。

Ⅵ もし有つてゐるならば，

a. 現存宗教の何れが最もよい宗教だと思つてゐますか。そしてその理由をも述べて下さい。

b. 現存宗教の何れにも不滿だとすれば，

1. その理由を述べて下さい。

2. あなたの理想の宗教はどんな性格を有たねばなりませんか。

(註)

(一) H. Volkelt: Ueber die Methode der Jugendpsychologie zur psychologie der werktätigen Jugend, 1926, S. 18—31.

(二) E. Stern: Gugendpsychologie, 1928, 2., Auflage, S. 67.

(三) O. Kupky: Religion und Weltanschauung des Gugendlichen, Zur Psychologie der werktätigen Gugend, 1926, S. 49.

本調査は昭和十七年十月から十一月の間に行はれた。

三　被　驗　者

慶應義塾大學豫科一年

文　學　部	六五名
經　濟　學　部	一七五名
法　學　部	七四名
醫　學　部	八五名
計	三九九名

藤原工業大學豫科一年　一四七名

總計　五四六名

年齢は十六年八ヶ月より二十一年二ヶ月に渉つてゐる。但し結果の整理に際しては、年齢を考慮外に置き、且被驗者を次の如く文科と理科との二群に分類した。

文科	文學部	六五名
	經濟學部	一七五名
	法學部	七四名
	計	三一四名
理科	藤工	一四七名
	醫學部	八五名
	計	二三二名
總計		五四六名

四結果

本調査は大別すれば六項より成つてゐるが、本稿に於ては第一項、第二項及び第三項卽ち（一）神佛の存在に對する態度（二）家庭の職業、宗敎、被驗者の永住地、健康狀態と神佛の存在に對する態度との關係（三）神佛不信の理由（四）信仰の對象（五）信仰の動機（六）信仰の理由（七）信仰の價値（八）禮拜（祈禱）的行動（九）無神論者に對する態度及び（一〇）以上の諸問題に於ける文理科の科別的結果のみを摘出し、殘餘の結果は之を別の機會に讓ることとする。

第一表　科別に見たる神佛の存在に對する態度別及びその頻數

態度別 ＼ 科別		一、信	二、不信	三、半信半疑	四、深く考へず	五、不明	六、無應答	計
文科	實數	215	79	13	3	2	2	314
	%	68	25	4	1	0.6	0.6	99.2
理科	實數	180	36	12	0	1	3	232
	%	78	15	5	0	0.4	1	99.4
差の%		−10	+10	−1	+1	+0.2	−0.4	

結果第一　神佛の存在に對する態度

宗敎の最も重要なる中心理念は、いふまでもなく神佛の理念であり、而して神佛に對する態度の最も基本的なるものは、神佛の存在に關する問題である。第一項「あなたは神樣

（佛様）の存在を信じてゐますか。……然―否」に對する解答を結果から六種に分類して見ると第一表の如くである。

この表に基き文理科を科別的に見る時、全體的傾向は略相等しく、「存在を信ずるとなす者」が第一位に在り、而も絶對多數を占め「不信となす者」が第二位、「半信半疑となす者」が第三位である。但しこゝに於て關心を惹くことは「存在を信ずるとなす者」の率が理科に於て、文科に於けるより一〇％高いこと「不信となす者」と「半信半疑となす者」とが合計二〇％乃至二九％に達してゐること及び神佛の存否に無關心なるかその判斷が不能なるべしと豫想さるゝ「深く考へざる者」「不明と答へたる者」の率の低いことなどである。

結果第二　家庭の職業、宗教、被驗者の永住地及び健康狀態と神佛の存在に對する態度との關係

家庭の職業、宗教、被驗者自らの永住地及び健康狀態と神佛の存在に對する態度との間に何等かの關係あるべしとの豫想の下に調査した結果は、第二表より第五表までに示されてゐる通りである。

第二表は家庭の職業と神佛の存在に對する被驗者の態度との關係を現してゐる。家庭の職業は無

職及び無應答を除いて三六種類に及んでゐるので、之を五大別した。「其他」の職業の中には地主、農業、劍士、旅館業、質業、宗教家、軍囑託等が含まれ、而して態度別中の「其他」には第一表中

第二表　家庭の職業と神佛の存在に對する態度との關係。

〔註〕 1. 其他の職業（地主，劍士，旅館業，質業，宗教家等を含む）。

2. 態度別中の其他（深く考へず，不明，無應答を含む）。

態度別	家庭職業別 / 頻度	一、專門學による職業	二、官公吏及び會社員	三、商業及び工業	四、其他の職業	五、無職	六、無應答	計
信	數實	57	115	76	44	35	68	395
	%	81	70	77	75	74	67	
不信	數實	13	38	17	11	10	26	115
	%	19	23	17	19	17	25	
半信半疑	數實	0	8	4	4	5	4	25
	%	0	5	4	6	8	4	
其他	數實	0	4	2	0	1	4	11
	%	0	2	2	0	1	4	
計	數實	70	165	99	59	51	102	546
	%	100	100	100	100	100	100	

第三表　家庭の宗教と神佛の存在に對する態度との關係。

〔註〕 1. 其他の宗教（天理教，儒教，道教を含む）。

2. 態度別中の其他（深く考へず，不明，無應答を含む）。

態度別	家庭宗教別 / 類數	一、神道	二、佛教	三、キリスト教	四、其他の宗教	五、無應答	計
信	數實	43	325	22	5	10	405
	%	73	74	60	72	72	
不信	數實	12	88	13	1	1	115
	%	20	20	35	14	7	
半信半疑	數實	4	17	2	1	1	25
	%	7	4	5	14	7	
其他	數實	0	9	0	0	2	11
	%	0	2	0	0	14	
計	數實	59	439	37	7	14	556
	%	100	100	100	100	100	

の「深く考へず」「不明」「無應答」の三者が含まれてゐる。

表によつて判斷すれば信ずる者の率は專門學による職業の家庭の者に於て最も高く八一％にして第一位を占め、商業及び工業の家庭の者に於て七七％にして第二位、其他の職業の家庭の者に於て

七五%にして第三位、無應答被驗者に於てその率が最も低い。

神佛の存在を信ぜざる者に就いて云へば、無應答被驗者を除く時には、官公吏及び會社員の家庭

第四表　被驗者の永住地と神佛の存在に對する態度の關係。

〔註〕 1. 其他の地方（臺灣，朝鮮，滿洲，中華民國，泰等を含む）。

2. 態度別中の其他（深く考へず，不明，無應答を含む）。

態度%＼被驗者永住地別	頻數	一、北海道奥羽	二、關東	三、關西	四、九州・四國	五、其他の地方	六、無應答	計
信	數實	15	241	80	26	25	8	395
	%	68	69	82	87	76	50	
不信	數實	6	79	14	4	7	5	115
	%	27	23	14	13	21	31	
半信半疑	數實	0	21	3	0	0	1	25
	%	0	6	3	0	0	6	
其他	數實	1	6	1	0	1	2	11
	%	5	2	1	0	3	13	
計	數實	22	346	98	30	33	16	546
	%	100	100	100	100	100	100	

第五表　被驗者の健康狀態と神佛の存在に對する態度との關係。

〔註〕 1. 健康狀態別，甲乙丙は被驗者の主觀的判斷。
2. 態度別中の其他（深く考へず，不明，無應答を含む）。

態度。	被驗者健康狀態別 / 頻數	一、甲	二、乙	三、丙	四、無應答	計
信	數實	244	141	8	2	395
	%	73	74	57	33	
不信	數實	72	36	5	2	115
	%	21	19	36	33	
半信半疑	數實	15	10	0	0	25
	%	4	5	0	0	
其他	數實	5	3	1	2	11
	%	2	2	7	33	
計	數實	336	190	14	6	546
	%	100	100	100	99	

の者の率が二三%にして最も高く、專門學による職業及び其他の職業の家庭の者の率が相等しく一九%である。

半信半疑被驗者の率は無職の家庭に於て最も高く、其他の職業、官公吏及び會社員の家庭の順となる。專門學による職業の家庭には一人もゐない。其他の者に就いては、實數が極めて少數である。

要之信ずる者の率は專門學による職業の家庭に於て最も高く、無應答を除けば官公吏及び會社員の家庭に於て最も低く、而して信ぜざる者の率は猶無應答を除けば官公吏及び會社員の家庭に於て最も高く、商業及び工業、無職の家庭に於て最も低い。

第三表は家庭の宗敎と神佛の存在に對する被驗者の態度との關係を示す。「其他の宗敎」には、天理敎、儒敎、道敎が含まれ、態度別中の「其他」は第二表の說明と同じである。　解答數が被驗者數より多きは、同一家庭に於て二個の宗敎を信ずるものがある爲である。

表に依れば信ずる者の率は佛敎の家庭に於て最も高く、七四%を占め、第二位は神道の家庭、而してキリスト敎の家庭に於て最も低い。不信の者の率はキリスト敎の家庭に於て最も高く、神道及び佛敎の家庭の者の率は共に二〇%にして、無應答被驗者の率が最も低い。半信半疑の者の率は其他の宗敎の家庭に於て最も高く、佛敎の家庭に於て最も低い。其他の者の實數は僅少であるので特に說明を要しないと思ふ。

要之信ずる者の率は佛敎信仰の家庭に於て最も高く、キリスト敎信仰の家庭に於て最も低い。信ぜざる者の率はキリスト敎信仰の家庭に於て最も高く、半信半疑の者の率は神道信仰の家庭に於て最も高い、但しキリスト敎及び神道信仰の家庭數は極めて少ないので之を重視し得ないかも知れな

い。尙キリスト敎は新敎であらう。

第四表は被驗者の永住地と神佛の存在に對する態度との關係を示してゐる。被驗者の永住地は極めて廣汎に涉つてゐるので、無應答を除いて五大別した。「其他の地方」には臺灣、朝鮮、關東州、滿洲、靑島、中華民國、及び泰が含まれてゐる。態度別中の「其他」は第二表中の其他と同樣である。

表に依れば信ずる者の率は九州、四國に於て最も高く八七%を占め、關西に於て八二%、最も率低きは無應答を除けば北海道、奧羽の六八%である。信ぜざる者の最高率は無應答を除けば北海道、奧羽で、二七%、第二位は關東の二三%、而して最低率は九州、四國の一三%である。但し北海道、奧羽、九州、四國、其他の地方永住者の實數は比較的僅少であるので、これによつて一般的傾向を判斷することは困難であらう。

半信半疑者は北海道、奧羽、九州、四國、其他の地方には一名もなく、關東に二一名、關西に三名ありて、その率は夫々六%、一%である。其他の者の實數は猶僅少である。

要之本調査に於ては信ずる者の率は九州、四國に於て最も高く、北海道、奧羽に於て最も低い。信ぜざる者の率は北海道、奧羽に於て最も高く九州、四國に於て最も低い。

第五表は被驗者の健康狀態と神佛の存在に對する態度との關係を現してゐる。表中甲乙丙は被驗者自らの健康狀態に對する主觀的判斷であり、態度別中の「其他」の意味は第二表中の「其他」と同じである。

表に依れば信ずる者の率は乙に於て七四%甲に於て七三%丙に於て五七%となり、信ぜざる者の率は丙に於て三六%甲に於て二一%乙に於て一九%となり、而して半信半疑の者の率は丙に於て零、乙に於て五%、甲に於て四%にして甲乙の差は僅少である。其他の者の實數は何れも僅少である。

要之甲と乙との差は何れの點より見ても極めて僅少であり、丙が比較的大きな開きを示してゐるが、實數が極めて僅少であるので、これによつて一般的傾向を判斷することは困難であらう。

結果第三　神佛の存在不信の理由

第一項の質問に續いて、神佛の存在を信ぜざる者に對してなされた第二項「もし信じてゐないならばその理由を述べて下さい」の解答卽ち不信の理由を大別すれば第六表の通りである。

この表によつて判斷すれば、その理由は大部分理性的根據から出て居り、特に經驗科學的色彩の濃厚なるものである。卽ち「神佛は人爲的假空物にして科學的に實證せられざるが故にその存在を

第六表　科別的に見たる神佛の存在を信ぜざる者の理由別及びその頻數

理由別	頻數	文科	理科	差の%
一、人爲的假空物にして實證せられざるが故に、	實數	30	18	−13
	%	37	50	
二、靈驗を感じたることなきが故に、	實數	10	0	+12
	%	12	0	
三、信ずる必要なし、	實數	7	2	+4
	%	9	5	
四、人力に不可能なることなきが故に、	實數	5	3	−2
	%	6	8	
五、萬物は科學的法則の支配を受くるが故に、	實數	4	3	−3
	%	5	8	
六、煩悶を有せざるが故に、	實數	3	1	+1
	%	4	3	
七、否定し得ない確固たる理由なきが故に、	實數	1	0	+1
	%	1	0	
八、神は存在し得ずと信ずるが故に、	實數	1	0	+1
	%	1	0	
九、馬鹿らしい、	實數	1	1	−2
	%	1	3	
一〇、深く考へず、	實數	12	5	+2
	%	16	14	
一一、不明、	實數	1	1	−2
	%	1	3	
一二、無應答、	實數	4	2	0
	%	5	5	
計	實數	79	36	
	%	98	99	

信ぜず」の範疇に入るものが、第一位にして而も他の理由より遙かに多い。此の傾向は科別的には理科に於て特に強い。二三の例を擧げて見る。

「人が神の存在を肯定するに至る道程は、成長期の絶對的環境に支配されるか若しくは自己の理性の弱さが、人生の疑問に遭遇した際、觀念的に作り上げた假空物である。故に人間に對立して空間的に存在する神は絶對にない。神は頭で作ることは出來ても人間が存在する如くには絶對に存在しない。自己の理性健全なれば、人類にとりて宗教の存在は無用である」(文科)。

「神樣等といふものは肉眼で見えぬから、その存在などは信じられぬ。又科學的に絶對に有り得ぬ」。(文科)。

「科學者にとつては神祕とか不可解とかいふものはない。神とか佛とかいふと凡そ科學とは反對の迷信とか占とかを聯想する。科學進歩の障碍である」(理科)。

「今迄に神の存否を殆ど檢討したことはありません、又僕は未だ神といふものを深く考へたこともないのです。……然し僕の信念として科學は結局自然のあらゆる門戸を吾々に開いて呉れるであらうと思ひます。今假に神祕があるとしても、必ず吾々はそれを科學的に證明して見せる積りです」(理科)。

「神様なるものは、自己欺瞞によつて苦惱を解決せんが爲に人類によつて、觀念的に作り出された、實證性なき假空の存在に過ぎず、前提として神の存在を肯定して以て信仰することは得心出來ぬ」（理科）。

「深く考へざるもの」を除いて、第二位は文科に於ては「靈驗を感じたることなきが故に」であり、理科に於ては「人力に不可能なることなきが故に」と「萬物は科學的法則の支配を受くるが故に」である。若干の例を擧げて見る。

「幼少の頃父母を失つて以來、僕に父母の靈がついてゐて守つて下さる等といふことを聞かされたが、現實に父母の靈に會つたこともなく、又經典を讀んでも訓話のやうにしか感じられません。また神佛に色々のことを祈つても失敗することが度々あり、お守りを持つてゐてもその效驗を感じたことがありません。以上の理由で神の存在を信じません」（文科）。

「私は今迄神佛の恩惠を受けたことはありません。例へば試驗の時お願ひしても度々失敗しました。そんな譯で神佛の存在を否定しようとする心が強い」（文科）。

「キリスト教を信じてゐましたが、不幸が二度（兄、弟の死去）訪れて來ましたので、神の存在、神の力を否定したい氣持です」（文科）。

「人間は自分に分らないことがあると、それを神の仕業であると考へ、そこに神の存在を信ずるのである。凡ての現象には原因と結果とがあるのであるから、神の仕業と考へるのは當つてゐない。だから神は存在しないと信じてゐます」（理科）。

第三位は文理科何れに於ても「信ずる必要なし」である。次の如き例がある。

「要するに世の中は實力の世界で、運とか神とかを考へることなく、あらゆる意味で自己の腕を磨くことが成功のエッセンスと確信するが故に神佛を信ずる必要なし」（文）。

「人間が眞實に正しく生きることが出來れば神は不要である。私はいま神を必要としない」（理科）。

尙「馬鹿らしい」には次のやうな例がある。

「人間が死んだならば、そこには我々の眼に見えるものは骨以外何物も存在しない。信者は人が死んだ後、靈魂が殘つて我々を導いてくれるとか云ふけれども、それは單に昔からのデマが本當として傳へられてゐるに過ぎないと思ふ。まだ自分は若いからさうなのかも知れないが、信仰等馬鹿らしい限りである」（理科）。

さてこの表に於て示されてゐる通り、理由は多種類に分類されてゐるが、それらを仔細に比較す

る時には、神佛の存在は理性特に自然科學の要求に合致せざるものとして否認されてゐることが分る。但し理科に於てその傾向が幾分強い。尙こゝに於て注意すべきことは、「自己の價値の發見」の根據からその必要を認めざる者の存在すること及び漠然と否認する者等が文理科何れにも可なりあることである。

更に神佛の存在を否認しつゝも尙且偉大なものに對して恐怖或は讃嘆の念を禁じ得ない、といつて半信半疑とも判斷されない複雜な意識を有する被驗者のあることを一言したい。それには次のやうな例がある。

「私の理性を以てする場合には、どうしてもその（神佛の）存在を信ずることが出來ません。だが山へ行つた場合、更には宇宙を凝視する場合には、何かいひ知れぬ恐怖とか驚異とか讃嘆とかの感に打たれます。然し一度理性的人間に歸ると、それらは皆自然の法則に從つて居るのであり、誰の意志でもないと考へます。このことは私にはまだ未知であり、これから研究しようと思つてゐます。然し私は否と言ひます」。

結果第四　神佛の存在に對する半信半疑の理由

神佛の存在に對して半信半疑となす者卽ち疑惑を抱く者の率は、豫想外に少なく文科に於て四%

理科に於て五%で科別的には大差がない。疑惑は種々の原因によつて生起するであらうが、自我の發見、「自己の價値の發見」、獨立の主張及び理性の覺醒は恐らくその有力なる原因であらう。いまその代表的な二三例を擧げて見る。

「神に就いて又神の存在に就いて友達と議論したり、自分で考へて見たりしました。それからいろんな本を讀んで見ました。が僕はどれにも滿足出來ないのです。そして色々な考が頭の中にごちや〳〵と入つて居り、少しもまとまつて居りません。僕は强ひて神樣といつて型にはめて終ふ氣になれないのですし又神樣を全然否定して終ふ氣にもなれないのです。これは哲學の本を少し讀んだ爲かも知れません」(文科)。

「私は時々人間に巡る運命或は大東亞戰爭に於て屢〻起つた奇蹟或は生命の神祕等を深く考へる時、私は目に見えぬ不可思議な流を感じ、之を神に結びつけて解決する。その場合には合點のゆかぬまゝに神を信じない譯には行かない。然し世間で說いてゐる神、書物に迷信的に說かるゝ神などは之を私は頭から否定する」(文科)。

「神の存在を問はれると、否といふ氣がするけれど、日常神の如きものが有る氣がします。神の存在と科學とは矛盾すると考へ……例へば神話にある如き神の靈力は不可能と考へ……神の存在を

否定します。しかし完全には否定し切れません。それがどんな神であるとまでは、はつきりしません」（理科）。

「自分は形態的な神とか佛とかの存在に關しては考へない。それは人が假定した時には存在する。則ち主觀的にのみ神佛は存在し、客觀的に存在すると考へることは不合理であるからである。しかしこの時の存在の意味は形態的な存在を意味しない。併し自分は常に自分以上の絶對的な力を有つものに對して、そのものは後に冷靜に考へたならば、肯定され得ないやうなものに對して賴る心を持たずにはゐられない」（理科）。

「深く考へざる者」「不明と答へたる者」及び「無應答の者」に就いては特に説明するを要しないであらう。

結果第五　信仰の對象

續いて第三項に於ては、主として信ずる者を目當としつゝ、更に項を分ちて信仰の對象、動機、理由、價値禮拜（祈禱）的行動及び無神論者に對する態度を取扱つた。

信仰の對象を探る爲の「もし信じてゐるならば、それは何んといふ神樣（佛樣）ですか」に對する解答は實に一三二種類の多きに達してゐる。いま之を「命名せる者」「命名せざる者」及び「無

第七表　科別的に見たる信仰の對象に對する解答者別及びその頻數

科別	頻數	一、命名せる者	二、命名せざる者	三、無應答者	計
文科	實數	153	74	14	241
	%	63	31	6	100
理科	實數	120	49	16	185
	%	65	26	9	100
	%の差	−2	+5	−3	

應答者に分類すれば第七表の通りである。

即ち自己の信仰對象を明示した被驗者は文科に於て六三%、理科に於て六五%にして大差なく、信仰を明示せず「漠然として規定し得ず」「特定の神なし」「名前などなし」「名を附するを要せず」「解らない」の五者を含む「命名せざる者」が文科に於て三一%、理科に於て二六%で、文科の率が幾分高く、無應答者の率は理科に於て幾分高い。この場合解答者數が文科に於て二六名、理科に於て五名、神佛の存在を信ずる者より多きは、神佛の存在を否認する被驗者及び半信半疑者にして而も信仰の對象を擧げてゐる者を含んでゐる爲である。

信仰對象を明示してゐる被驗者の擧げてゐる對象は、一一六種類に及んでゐる。之は種々の觀點より分類されるであらうが、筆者は「日本傳來の神」「佛敎關係」「キリスト敎關係」「二箇の對象」及び「其他の對象」とに五大別した。その頻數は第八表の通りである。

第八表　科別的に見たる信仰の對象別及びその頻數

科別	文科		理科		計
信仰對象別 ＼ 頻數	實數	%	實數	%	
一、日本傳來の神	62	40	28	23	153
二、佛教關係	17	11	8	7	99
三、キリスト教關係	7	5	9	7	122
四、二箇の對象	5	3	3	2	100
五、其他の對象	62	40	74	61	
差の%	+17	+4	−2	+1	−21

この表に示されてゐる通り、文科に於ては「日本傳來の神」を信仰對象とする者と「其他の對象」に信仰を求めてゐる者とが同率にして第一位を占め、第二位は「佛教關係」を信仰對象としてゐる者である。但しその率は第一位に比し非常に低い。地方理科に於ては「其他の對象」に信仰を求めてゐる者が第一位を占め、而もその率は極めて高く、第二位は「日本傳來の神」を信仰對象とする者で、第三位は「キリスト教關係」を信仰對象とする者である。

「日本傳來の神」の範疇に入る神々は、三一種類を數へ得るが、「皇祖及び現神」に關し奉る者（例へば「天照大神」「天照大神と歴代の天皇」「現神」「天皇卽絶對者」等）が、文理科何れに於ても最も多く、文科に於て五二%、理科に於て六八%を占めて居り、理科の方が一三%だけ多い。第

二位は「八百萬神」で文科に於て一六%、理科に於て一一%あり、文科の方が幾分多い。/この他には「天御中主神」「靖國の神」「九軍神」「國事に盡したる人の靈」「祖國の守護神」「氏神」及び「福の神」などが擧げられてゐる。

「佛教關係」の範疇に入るものは、九種類にして文科に於ては「釋迦」「佛樣」が同率にして最も多く二四%宛を占め、理科に於ては「釋迦」が第一位にして六三%を占めてゐる。その他「阿彌陀佛」「親鸞上人」「觀世音菩薩」等が對象となつてゐる。

「キリスト教關係」の範疇に入るものは、八種類にして、文科に於ては「キリスト」が四三%で第一位に在り、理科に於ては「エホバ」が第一位に在り、三三%である。その他には「エホバと運命」「ルーテルの新教」「キリストを通しての神」等が有る。

「二箇の對象」の範疇に入るものは七種ありて、文科に在りては「天照大神と親鸞上人」が二名の被驗者によつて擧げられ、他は文理科とも一名宛の信者を有するのみである。それには例へば、「國土創造の神々と死者の靈」「禪宗と神社」等が有る。

以上の中「佛教關係」「キリスト教關係」「二箇の對象」に信仰を求むる被驗者の數は、文理科夫々に於て少數であるので（第八表參照）あまり重く見ることは出來ないであらう。

最後に以上四種類以外の對象の範疇に入るものは、六三種類に渉つてゐるが、文科に於ては「自己」（例へば「自己の心の中に在るもの」「自己の努力」「自己の信念」等）を對象とする者が、三一％にして第一位、理科に於ては「祖先」を對象とする者が一五％にして第一位、文科に於ける第二位は「宇宙及び自然」に關するもの（例へば「宇宙全體を統ぶる唯一絶對神」「自然を創造し、自然を支配する神」「自然神」「宇宙の神」等）に信仰を捧ぐる者で一八％、理科に於ける第二位は猶「自然」に關するものであるが具體的には文科とは稍異り「自然それ自體」「自然の法則」「宇宙の靈妙不可思議」「自然の攝理を司る神」「自然を創造し、自然を司る神」等が擧げられ、一二％、第三位は文科に於ては「祖先、家族の靈」（例へば「祖先」「亡き母」「亡き姉」「亡き妹の靈」等）で一六％、理科に於ては「自己」（例へば「自己の心の中に在るもの」「自己の信念」「自己の良心」等）に關するもので九％有る。

爾餘の對象には「抽象的な神といふもの」「あらゆる現象の根柢となるもの」「唯神」「神道、佛教、キリスト教に共通な神」「運命」「生命といふもの」「心」「ある絶對者」「神祕的なるもの」「絶對的眞理」「劍聖」「美の創造神」等がある。

「自己」「自然の法則」「絶對的眞理」「自然自體」「運命」等を對象とする信仰が果して、宗教的

信仰と稱し得るか否かは、神の概念の意味が闡明されなければ決定されず、而して神の概念は宗教哲學によつて規定せらるべきであらう。たとへかくの如き對象を信仰する者が、信仰ありと判斷さるゝにせよ或は信仰なしと判斷さるゝにせよ、かゝる對象を信じ、それに限りなき尊崇の心情を捧ぐる青年學生の存在することは、僞らざる現實の一相であらう。

次いで神（佛）の形態と個性とを求めたのであるが、解答より判斷して稍困難であつたことが豫想さるゝと共に、神（佛）の形態と個性とは信仰にとりて、必ずしも重要なる條件とは思はれないので、本稿に於ては省略することとした。

結果第六　信仰の動機

次に信仰の動機を知る爲に左の質問を發した。卽ち

神（佛）存在の信仰は

1. あなたの推理（そしてそれはどんな推理）の結果から生じたものですか。
2. あなたの體驗（そしてそれはどんな體驗）から生じたものですか。
3. 他人に敎へられた結果から生じたものですか。
4. 家庭等の周圍（そしてそれはどんな周圍）の感化から自然に生じたものですか。

第九表　科別的に見たる信仰の動機別及びその頻數

動機別＼科別	文科 實數	文科 %	理科 實數	理科 %	差の%
一、推理	41	18	27	14	+4
二、體驗	14	6	21	11	−5
三、教育	23	10	12	6	+4
四、自然的感化	33	14.4	39	20.5	−6.1
五、其他	9	4	5	2.5	−1.5
六、推理と體驗	9	4	9	5	−1
七、推理と教育	8	3.5	7	4	−0.5
八、推理と自然的感化	13	6	9	5	+1
九、體驗と教育	4	2	5	2.5	−0.5
一〇、體驗と自然的感化	10	4.3	4	2	+2.3
一一、體驗と其他	1	0.4	3	1.5	−1.1
一二、教育と自然的感化	12	5.2	11	6	−0.8
一三、自然的感化と其他	1	0.4	2	1	−0.6
一四、推理と體驗と教育	2	0.8	0	0	+0.8
一五、推理と體驗と教育と自然的感化	10	4.3	8	4.7	−0.4
一六、推理と體驗と教育と自然的感化と其他	1	0.4	0	0	+0.4
一七、推理と體驗と自然的感化と其他	1	0.4	0	0	+0.4
一八、推理と體驗と自然的感化	8	3.5	2	1	+2.5
一九、推理と教育と自然的感化	10	4	3	1.5	+2.5
二〇、體驗と教育と自然的感化	3	1.3	1	0.5	+0.8
二一、教育と自然的感化と其他	0	0	1	0.5	−0.5
二二、推理と其他	0	0	4	2	−2
二三、推理と教育と其他	0	0	2	1	−1
二四、推理と體驗と其他	0	0	1	0.5	−0.5
二五、推理と自然的感化と其他	0	0	1	0.5	−0.5
二六、體驗と教育と其他	0	0	1	0.5	−0.5
二七、無應答	15	7	12	6	+1
計	228	99.9	190	99.7	

5. 其他。

推理、體驗、教育、自然的感化及び其他の動機の頻數は第九表の通りである。

この表に依れば、文科に於ては「推理による者」が一八%にして第一位、「自然的感化によるもの」が一四、四%にして第二位、「教育によるもの」が一〇%にして第三位であり、而して理科に於ては「自然的感化によるもの」が二〇、五%にして第一位、「推理によるもの」が一四%にして第二位「體驗によるもの」が一一%にして第三位である。

尙この場合解答者數が、文科に於て一三名、理科に於て一〇名、神佛の存在を信ずる者より多きは、神佛の存在を否認する者及び半信半疑者にして而もその動機を擧げてゐる（これは何等かの對象を信仰してゐることを意味するであらう）者を含んでゐる爲である。

而して動機の內容を說明してゐる者は文科に於て一二五名、理科に於て一〇三名であるが百分率は共に五八%である。

次に動機の內容に就いて少しく檢討を加へることとする。

「推理の動機」に與へられた說明の種類を大別して夫々の例を擧げて見る。

自然界の現象に關するもの。

「自然界の諸現象は之を機械的に、唯物的にのみ解釋することがどうしても出來ず、從つてそこに神の存在を信ずる。……あらゆる現象は神の顯現である」（文科）。

「天體の運行に統一あることを始め、森羅萬象には調和が常に有ることを知る時、私は之を創造する神がなければならぬと考へます」（文科）。

「さうです。現在の吾々にはどうしても解決出來ない問題が限りなく有る。試みに夜空に輝く星辰を見よ。各星辰の引力により均衡を保ちつゝ運行する壯觀を想念せよ。實に天體は、吾々の知ると否とに拘らず確實に運行を續けるのである。吾々はそこにどうしても自然を創造し、自然を支配する神を信ぜざるを得ない」（理科）。

「宇宙の生成、自然物（動植物）の調和、複雜さを考へる時、何かの目的を以て造られたかのやうに考へられます。目的といふことを考へると、どうしても神がなければならぬと考へざるを得ません」（理科）。

生の問題に關するもの。

「人生と道德との關係を考へてゐる中に神がなければならぬと考へるに至つた」（文科）。

「生命や生活を深く考へて見ると、どうしても之を創り、之を支配するものがあるに違ひないと

考へざるを得ない」（文科）。

「さうです。現在の私にはどうしても解き得ない問題が澤山あります。そしてそれらは「神」の名によつてのみ解かれる。私は神を考へる以外に私の存在の意義を知り得ない」（理科）。

「科學者が細胞を如何に研究しても、生命がどうして出てくるかを解き得ません。人間の力ではたとへ微小な生物でも之を造ることは出來ません。そこには神祕なものがあります。又どんなに微小な生物でも己れの生命を完ふする爲に全力をつくしてゐます。結局人間の能力は小さなものです。この小さな人間を越えた絶對無限な神がある筈です」（理科）。

尙この他に兩者の混合したものもある。

「體驗の動機」に與へられた說明の種類は非常に多いので、大別して次に若干例を擧げることとする。

生死、疾病に關するもの。

「體驗としては僕の母が死んだ時父は決して悲まず、只稱名念佛して靜かに母の前に坐し直に線香の用意などしました。私はそこに別人のやうな崇高な父を見ました。父は僧侶であるので常に往生の大義を心得てゐるものと思ひます。その時以來僕の心にも安らかに死にたい、そのためには佛

信心をしようとする心が芽生えて來ました」（文科）。

「幾度もの重病や不慮の事故から九死に一生を得た經驗から、目に見えぬ何かがあつて僕を救つて呉れたのだと思ふやうになり、神佛の存在を信ずるに至つた」（理科）。

道德に關するもの。

「良心に恥ぢない行動をとつた時には結果がよく、不正の行動をとつた時には結果がわるいといふことを身に於て經驗したので、それは神のなし給ふところと考へ、信仰するやうになつた」（文科）。

「惡の滅亡を見て、それこそ神の下した所謂天罰であるといふ考から信仰の心が生じた」（理科）。

神社佛閣の參拜に關するもの。

「皇太神宮の參拜以來神信心の心が起つた」（文科）。

「祖父母、妹の送葬の際、その莊嚴、嚴肅に心打たれて以來神佛の存在を信ずるに至つてゐる」（文科）。

その他、「未知のものへの恐怖」「宇宙の神祕特に美しき星辰を仰ぎ見て」「坐禪をしてゐる中に」「念佛を申してゐる中に」「武道を修してゐる中に」「試合に際して」「佛畫を拜して」等の動機が

擧げられてゐる。

「敎育の動機」として擧げられてゐるものは、家族特に兩親、先生、交友、及び戰地よりの歸還者等によつて與へられてゐることを示してゐる。

「自然的感化の動機」に與へられた說明より判斷すれば、「宗敎的信仰の厚い兩親より」「和合感謝の生活を送つてゐる家庭より」と答ふるものが最も多いが、學校、交友よりとの答もある。

「其他の動機」の中では讀書によるとなす者が最も多い。「出家とその弟子」「法然と親鸞」「善の研究」「古事記」「日本書紀」「萬葉集」「大義」「石門心學」等の書名が現れてゐる。この他に尙「各動機の綜合の結果として信ずるに至つたもの」「自然に」「一休和尙の人生觀に共鳴して」「心にひらめいた」等の動機が擧げられてゐる。

以上推理、體驗、敎育、自然的感化及び其他の五項に分け、主として何れの動機によつて信仰を抱くに至りたるかをたづねたところ、前述の如くその順位は文科に於ては、推理、自然的感化、敎育、體驗、其他となり、理科に於ては自然的感化、推理、體驗、敎育其他となつてゐる。これによつて判斷すれば推理の動機は文理科何れに於ても極めて重要であることが解る（但しその百分率が理科に於て稍低きは常識的見解と多少異るやうに思はれる）。然しこの順位より直に推理の動機に

對する非常に高き評價が許されるか否かに就いては多少疑なきを得ない。この問題に關しては尙多くの研究を要するのであるが、本調査の資料に基いて考へても、推理を動機となす被驗者にして、その內容を說明してゐる者は比較的少なく「信仰は推理などに依るものにあらず」と積極的に之を否定する者もあり、更に與へられた說明の中に、成程自覺的には推理と稱しつゝも、必ずしもそれに値せざるものが可なりあつて、前述の諸例は皆代表的のものである。加之追想に於ける錯覺の混入も考へ得べく又感情を基調とする靑年の矛盾を含む一般的性格を考慮する必要もあると思はれるのである。次に自然的感化は文科に於ては第二位であるが、理科に於ては第一位であり、之に敎育を加ふる時は（この場合敎育は意識された敎育を意味したのであるが、實際に於ては自然的感化と區別され難い）文理科何れに於ても第一位を占むることとなる。之は常識的見解と正しく一致してゐる。而して家庭に於ける自然的感化並に敎育によるものと自覺してゐる被驗者が大部分を占めてゐるが之も十分首肯し得られる。體驗の動機の頻數は文理科何れに於てもさ程多くはない（尤も年齡的に云つて當然かも知れない）が、感情的契機を含むことが多いので却々有力なる動機であらう（前述の代表例參照）。まさしくこゝから宗敎意識が展開して行くのではなからうか。その問題には今は觸れない。

結果第七　信仰の理由

信仰にはある種の願望充足の根據もあるべしとの想定の下に「神樣（佛樣）が存在すると考へた方が、あなたの生活態度を安定ならしむるといふ理由の爲ですか」と發問した。これは側面から信仰の理由を問ふものである。解答を六種に大別すれば第十表の通りである。

第十表　側面より科別的に見たる信仰の理由別及びその頻數

〔註〕 1.「然」は生活態度の安定を求むる爲に信仰する者

2.「否」は生活態度の安定を求むる爲には信仰せざる者

科別	解答別 / 頻數	一、然	二、否	三、隨時然否	四、無關心	五、考へず	六、無應答	計
文科	實數	81	63	7	12	4	61	228
	%	35	28	3	5	2	27	100
理科	實數	79	48	4	7	4	38	180
	%	44	26	2	4	2	21	99
差の%		−9	+2	+1	+1	0	+6	

即ち文理科とも殆ど同じ傾向を示し、「然」が第一位（但し理科の率が稍高い）「否」が第二位（但し文科に於て稍率高く）無關心はさ程多くはないが、無應答の率の可なり高いことが目だつ。

この發問に於ては特に說明を要求

してゐないので、説明を附せざるものが多い。「然」解答者中には「さういふ理由もある」「確かに安定します」といふ程度を示す言葉を述べてゐるのが多少あるのみである。「否」の説明には種類多く適當に分類することは困難であるが、絶對的理由と願望充足の理由（功利的理由）とに大別して先づ代表例を擧げて見る。

絶對的理由。

「そんな功利主義的、個人的理由よりも神は存在すべきものだと思ふからです」（文科）。

「神佛の信仰は秤によつて利得が云々さるべきものではない。かやうな功利的態度は誠に幼稚である」（文科）。

「理由ない。神」（理科）。

「神が存在するが故に心は安定である」（理科）。

「神を信じないことは有り得ない」（理科）。

「そんな打算的理由などはありません。生活態度の安定は理由ではなく結果です」（理科）。

「自己の内的欲求として」（文科）。

「日本人として誰もが生れつき持つてゐると思ふ」（文科）。

「我國は神國なりとの信念より」（理科）。

「祖先より受けついだ信仰を有たないことは罪惡なりといふ絶對的氣持から」（文科）。

この他「神は絶對者なるが故に」「唯、神に祈りたい氣持から」「神の存在を信ずることは神聖なりとの信念から」「神有らねばならぬの信念から」等が擧げられてゐる。

願望充足（功利的）の理由。

一面に於ては、功利的信仰態度を否定する者が存在してゐる他面に於ては、なほその態度をとる者の存在してゐることが直に觀取される。

「そんな方便的な考からではないが、古の聖賢の行爲思想をみて、眞に神の中に生きた人が幸福であると信じた爲に」（文科）。

「神を信ずることにより、生活に、うるほひが出來て、ゆとりのある生活を營むことが出來るから」（文科）。

「別にそのやうに考へるのではないが、危險な時神樣！と心に念ずるので、神樣が存在すると考へた方が、生活態度が安定すると思ふ」（文科）。

「生活態度を安定ならしむるといふよりは寧ろ、人間が運命に對する恐怖より、どこか心の據所

を持つ、それが神である」（文科）。

「神の存在を認めた方が認めないより凡ゆる點に於て優れてゐる」（文科）。

「吾々が神樣を信じ、日々感謝の心を以て生活すれば決して人倫を踏み外すことはないと思ふ」（理科）。

「信仰によつて必ずしも生活態度が安定しないが、弱い人間は必ず何か偉大な力にすがりたい氣持を持つ、之は他面から見れば自分の生活態度を安定にするかも知れない」（理科）。

「長い歴史が認めてゐるものを否定しては淋しいので」（文科）。

「護國の英靈が眞に國家を守つて下すつたといふ信念から、自己を神に飛び込ませて立派な人格を形成せんが爲に」（文科）。

この他、「私を完全ならしむる爲に」「豐になる爲に」「心の安定を求むる爲に」「日本を中心として世界を安定ならしむる爲に」「神物の信仰なくしては人は出來ぬ」「困難に打ち克たんが爲に」「事をなす時祈りたい氣持から」等がある。結果第六、信仰の動機の節を參照して頂きたい。

却説本質問に對して否定的態度をとる被驗者が文科に於て二八%理科に於て二六%あるに拘らず前述の諸例に於て十分認めらるゝ如く猶功利的信仰態度をとるものがあるといふこと而も可なりあ

ることが觀取されるのである。但しそれは純粹に精神的であるやうに思はれる。

結果第八　信仰の價値

第六、第七に於て信仰の動機及び理由を探つたので、次に信仰の價値をたづねる目的を以て「もし神樣（神樣）の存在を信じなければ、あなたの生活に何か變つたことが起りさうに思へますか。そしてそれはどんな變事ですか」の質問を發した。その解答を「然」「否」「不明」「無應答」に分類すれば第十一表の通りである。

第十一表　科別的に見たる信仰喪失に當りての變事生起の豫想の然否別及びその額數。

〔註〕 1. 「然」は變事生起の豫想を有するもの。
2. 「否」は變事生起の豫想を有せざるもの。

科別	解答別	一、然	二、否	三、不明	四、海應答	計
文科	實數	69	74	59	24	226
	%	30	33	26	11	100
理科	實數	61	55	18	54	188
	%	32	29	9	29	99
% の差		−2	+4	+17	−18	

即ち文科と理科に於て稍傾向を異にし、文科に於ては「否」が三三%にして第一位、「然」が三〇%にして第二位、理科に於ては「然」が三二%にして第一位、「否」が二九%にして第二位であり、「無應答」が理科に於て非

常に多い。

「否」解答には「否」「起りさうに思へません」程度のものが大部分で、次の例の如く結局「然」に屬する解答が少數ある。「別に變つたことが起りさうにも思へないが、そしてないと思つても、危機が迫ると本能的に神樣を祈念するので、若し本當に神樣が存在しないといふことになれば、危機に臨んで限りない賴りなさを感ずると思ふ」。「信じなくも生活に變化はないと思ひます。神佛は人間が信ずると否とに拘らず存在して人間に働きかけるのですから」。「たとへ起つたとしても私はまだ神を信じないが故だとは信じ切れない惱みがあります。考へてゐるのです」。「平常の場合には變事が起らないと思ひます。たゞ一生の難關に際して又墮落の底に陷つた時などは神樣こそ吾々に希望を與へ、幸福への糸口を與へるものと思ひます」。尙「不明」には「深く考へたことがないから分らない」の如き解答が多い。

「然」の說明は「起りさうです。然し具體的には分りません」等の如き穩かな信仰態度から「信じない者はない。信じないとは僞である。低能である。すべては存在を信ずることが前提である。」「私の場合は若しといふ言葉がおそろしい位です」等の熱烈な信仰態度の間に配序されるやうに思はれる。いまそれらを大別して例證しよう。

安定感の喪失。

「自分は缺點だらけの小人である。（自分は少なからず荀子の性惡說に共鳴する）それでも目をつぶるか眠に入る前に、佛の像、母の像を瞼に浮べれば「ありがたい」「安らかな」感じに滿たされる。もし佛樣が存在しないとすればどうなるであらうか」（文科）。

「一日として安らかな日は送れないと思ふ。卽ち吾々は神佛を信仰すれば、その御加護を頂けるものと信じ、この世に恐怖がなくなる」（理科）。

道德的生活、理想の崩壞。

「道德的觀念を喪失し、デカタン的生活を營み、生活の中必を失ふに至るであらう」（文科）。「理想は消失し、前途はくらく快樂主義に陷るであらう」（文科）。「自分は意志が弱いから、身を誤まるか世を呪ふに至るかも知れない」（理科）。「動物的、個人主義的生活をなし、惡を全く恐れざるに至らん」（理科）。

國民意識の低落。

「眞の日本人たる自覺を失ふに至るであらう」（文科）。「生活に熱情がなくなり、日本精神が分らなくなるであらう」（文科）。「眞の日本國民が消えるだらう」（理科）。

孤獨感の發生。

「心のすがる所を失つて生活の淋しさを感じます」（文科）。「……全くの孤獨、據所のない淋しさを感じます。眞に信じうるのは神のみです」（理科）。

社會秩序の崩壞。

「日本人が神の存在を否定するならば、國家の安泰、社會の秩序が崩壞するであらう」（文科）。

生命の破滅。

「神を否定すれば僕は狂人となるか死ぬかするより他に道はない」（文科）。

生存の意義喪失。

「世の中の惡事は皆無神論者によつてなされてゐる。故に神の存在を信じなければ私の生活もあり得ない」（文科）。「私が存在する意義、目的が全くなくなつてしまうでせう」（文科）。「生活が全く空虛となるであらう」（理科）。

以上の他、「人間としての價値を失はん」「世の中の尊いものを失つてしまひます」「生活よりは思想が變る。私の思想は神を認める點から出發してゐるから」「非合理の中に貴いものを認める美しい心がなくなります」「明るさを失はん」「感謝の氣持を失はん」「恐怖を覺えん」「行動の自由を

失はん」等が現れてゐる。

却説神佛の信仰を失つた場合、その態度に如何なる變化が起るかは恐らく何人にも豫想されないであらう。從つて筆者はこゝに於て寧ろ信仰を有つ被驗者がその信仰に如何なる價値或は意味を附與してゐるかを調査せんとしたのである。而してその解答は第十一表の如く「然」（變化が起る）が文科三〇%、理科三二%、「否」（變化が起らぬ）が文科三三%、理科二九%、「不明」が文科二六%、理科九%、「無應答」が文科一一%、理科二九%であつた。但し「否」解答中、説明を附してゐるものを檢すると、猶「然」に屬する性質のものである點から察すれば、説明を附せざる「否」「不明」更には「無應答」中にも「然」に屬する性質のものが相當あるであらうと豫想されるのである。この豫想に基づけば、信仰を有つ者の可なり多くは、信仰を失つた曉に於ては、何等かの變事を經驗するであらうと考へてゐる、少くとも漠然たる感情に於ては何等かの變化が起るべきことを豫想してゐると想定し得るやうである。然し前述の諸代表例の示す如く、變事經驗豫想の程度には深淺の段階がある。が信仰喪失の曉、果して「狂人となるか或は死ぬか」するであらうか。恐らくは「（變事が）起るだらう或は死等といふことを考へるでせうが、それにしては自分は餘りに驕病です。結局そのまゝ過して行くことが出來るのではないでせうか」（文科）の臆測の如く、さした

る變化もなく生存を續けて行くであらう。

程度の問題を離れて次に性質を檢討すると大體三種類に分けられるやうである。即ちその一は、「平常の場合には變事が起らないと思ひます。たゞ一生の難關に際して又墮落の底に陷つた時などは神樣こそ吾々に希望を與へ、幸福への糸口を與へるものと思ひます」の例に見る如く危機より己れを救濟して貰へる意味に於て神佛を信仰する類型、即ち神佛の信仰に利用價値を認むる類型であり、その二は「信じない者はない。信じないとは僞である。低能である。すべては存在を信ずることが前提である」の例に示されてゐる如き神佛に對する絶對歸依の類型であり、而してその三は、「自分は缺點だらけの小人である。……それでも目をつぶるか眠に入る前に、佛の像、母の像を瞼に浮べれば「ありがたい」「安らかな」感じに滿たされる。もし佛樣が存在しないとなればどうなるであらうか」を始めとして「然」解答の說明に見らるゝ諸例の示す如く、吾を抱擁し、理解し且提撕するを厭はざる心情を有つ親として神佛を信仰する類型である。筆者の被驗者に於ては第三の類型が多かつた。而して眞正なる宗敎的信仰態度としては、いふまでもなく第二及び第三の類型であらう。かくしてもし神佛の存在が否定さるゝとすれば、かゝる類型の被驗者はその瞬間に於て直に神佛を案出するであらう。

結果第九　禮拜（祈禱）的行動

次に禮拜（祈禱を含む）的行動の研究の面からも、信仰の價値を吟味することが出來る。蓋し禮拜は一面に於ては確かに信仰の具體的表現と考へられるからである。かくして禮拜に關して種々の質問を發した。「あなたは機會ある毎に神樣（佛樣）に禮拜してゐますか。……然―否」に對する解答を「然」「否」「隨時」及び「無應答」の四種類に分類すれば第十二表の通りである。

第十二表　科別的に見たる禮拜（祈禱）の然否別　。

〔註〕 1. 「然」は禮拜するもの。
2. 「否」は禮拜せざるもの。
3. 「隨時」は隨時禮拜するもの。

科別	解答別	一、然	二、否	三、隨時	四、無應答	計
文科	實數	185	30	22	3	240
	%	77	13	9	1	100
理科	實數	152	26	12	2	192
	%	79	14	6	1	100
差の%		−2	−1	3	0	

この表に依れば文理科の傾向は殆ど相類似し、「機會ある毎に神樣（佛樣）に禮拜（祈禱）する」となす者が絶對多數を占め、「禮拜（祈禱）せず」となす者、「隨時禮拜（祈禱）する」となす者の順序となるが、後二者の率は極めて低い。この場合解答者數が文科に於て二五名、理科に於て一二名神佛の存在を信ずる者より多きは、神佛の

存在を否認する被驗者及び半信半疑者にして而も「禮拜（祈禱）する」となす者を含んでゐる爲である。

次いで「もし禮拜（祈禱）してゐなければその理由を述べて下さい」といふ質問に依り、禮拜（祈禱）しあらざる理由をたづねた。而してその理由を擧げてゐる者は文科に於て、禮拜（祈禱）せずとなす者三〇名中二一名、理科に於て禮拜（祈禱）せずとなす者二六名中一八名であり、百分率は夫々七〇％であつた。而もそれらの理由を若干の範疇に類別することは困難であるので、こゝにその代表的例を擧げることとする。

「合掌し、禮拜することが何か外面的のやうでもあり、また大袈裟にも感じられるから」（文科）。「何んとなく恥しい、それのみではなく、いさゝか馬鹿馬鹿しくもある」（文科）。「何んとなく虛心に見えるからです。形式的に禮拜するなら、しない方がよいと思ふからです」（文科）。「私は心の中で神を信じてゐる。頭を形式的に下げてそれがどうして禮拜してゐるといへやう。私は心の中ではいつも頭を下げてゐる」（文科）。「神は人間を超越してゐるから、禮拜といふ行動をせずとも、精神的のみで十分であるから」（文科）。「信仰の本質は禮拜に在るのではなく心に在るから」（文科）。「禮拜するしないといふことより、信ずる方が重大であり、信ずることに搖ぎなければ、敢て

不敬とも冒瀆とも思ひません」(文科)。「私の神は禮拜の對象ではない」(文科)。「神は絶對の者であり、吾々の心に存するものであるから、心に神の存在を信じ、それを信仰すればよいので形に表して禮拜する必要はない」(理科)。「强ひて禮拜等形式的な事は必要ないと思ふ。心の中で禮拜して居ればよい」(理科)。「未だ神を求むるにそれ程熱心ではない」(理科)。「人前では好みません。純粹でないやうに思へます。氣持だけしっかりして居ればよいと思ひます」(理科)。「禮拜しても何の結果もあらうと思はないから」(理科)。「意志の弱さと禮拜することが往々自己欺瞞に陷るからです」(理科)。

以上の諸例に於て吾々は青年學生が禮拜的(祈禱的)行動の中に信仰の非本質性(形式性、外面性)、羞恥性、無效果性等を認めてゐることを發見する。即ち吾々はこゝに青年の有つ性格の一面を看取し得るのである。

次には禮拜しある被驗者を目當てとしつゝ

「もし禮拜してゐるならば

(1)自發的にですか。

(2)他より强ひられてですか。

(3)習慣上からですか。

(4)其他」

第十三表　科別的に見たる禮拜（祈禱を含む）の動機別及びその頻數。

〔註〕其他は，「自然的に」「自ら」等の動機を含む。

科別	動機別	一、自發的	二、習慣的	三、其他	四、自發的と習慣的	五、習慣的と其他	六、無應答	計
文科	實數	108	29	10	49	1	10	207
	%	52	14	5	23.6	0.4	5	100
理科	實數	80	25	8	39	5	7	164
	%	49	15	5	23	3	4	99
差の%		+3	−1	0	+0.6	−2.6	+1	

の質問を發して禮拜の動機をたづねた。自發的、强制的、習慣的及び其他の動機の頻數は第十三表の通りである。

この表に依れば文理科の傾向は殆ど相類似し、「自發的に禮拜する」となす者が最も多く第一位を占め、「自發的と習慣的との兩者によりて禮拜する」となす者が第二位「習慣的に禮拜する」となす者が第三位である。

最後に禮拜する場合何等かの欲求を有するか否かを換言すれば主として禮

拜の理由をたづねる爲に「もし禮拜してゐるならば、それは何かを求むる心からですか、或は禮拜すべきものなるが故からですか」といふ質問を發した。但しこの質問の形式は甚だ拙劣であつたと考へてゐる。

それは兎に角文科に於て禮拜（祈禱）するとなす者二〇七名（第十二表參照）中、この質問に解答したる者は一二〇名でその百分率は五八%、理科に於ては一六四名（第十二表參照）中、この質問に解答したる者が九〇名で、その百分率は五五%で何れの科に於ても高率を示してゐる。而してその解答者（文科一二〇名、理科九〇名）中、求むるものの如何を問はず、何等かの願望を抱いて神佛に禮拜（祈禱）すると見做さるゝ者が文科に於て六五名（五四%）理科に於て三六名（四〇%）であり、何等の願望をも抱かずして禮拜（祈禱）すると見做さるゝ者が夫々五五名（四六%）五四名（六〇%）である。この結果を信仰の理由の質問に於ける結果と對照すれば、文科の結果は一致し、理科の結果は逆となる（第十表參照）。更にこの質問に應ずる理由は特に要求されて居らないので、あまり述べられてゐないが、述べられてゐる限りに於ては信仰の理由の質問に對してなされたものと大同小異であるのでそれを省略する（結果第七參照）。要するに神佛を禮拜（祈禱）する際には、心の中に何かを求むる（但し主として精神的）態度の人と何をも求めざる態度との人が相半ば

するかの如くである。

結果第十　無神論者に對する態度

第八に於て、被驗者が信仰に如何なる價値を置いてゐるかの問題を取扱つたので、それと關聯して無神論者に對して如何なる態度をとるかを見る爲に「あなたは他人の無神論者を快く承認することが出來ますか」の質問を發した。これによつて信仰の深度を見ることも出來る。その解答を「承認」「不承認」「批判の上で」「無關心」「無應答」の五種類に大別すれば第十四表の通りである。

第十四表　海神論者に對する態度別及びその頻數

科別 ＼ 態度別 ＼ 頻數		一、承認	二、不承認	三、批判の上で	四、無關心	五、無應答	計
文科	實數	48	128	5	29	16	226
	%	21	57	2	13	7	100
理科	實數	40	99	8	21	20	188
	%	21	53	4	11	11	100
差の%		0	+4	−2	+2	−4	

この表に依れば文理科とも殆ど類似の傾向を示し、不承認が五〇%以上にて第一位を占め、承認が共に二一%にて第二位に在り而して無關心が割合に多い。

この質問に對しても特に說明を要求しないので「出來ます」「いーえ」「何れでも構ひません」等の解答が多い。次に與へられた說明の代表例を若干擧げて見る。

無神論承認說を積極的と消極的とに大別し夫々の代表例を示すと左の如くである。

積極的承認。

「僕は凡ての人の存在の自由を認めたく思つて居ります。從つてその思想の自由を認めることとなります。かくしてその人が他に災を及ぼさず、自分一個の思想としてゐる限り、無神論も快く認めます」(文科)。

「出來ます。といふのは神の存在の信不信は各人の主觀の問題であるからです」(理科)。但し積極的承認はあまり多くない。

消極的承認。この形式は非常に多く、それを細分すると幾つかの型が生れてくる。

無關心的。

「信仰は各人の任意な問題ですから、私は何んとも思ひません。然な無神論者もそれなりに哲學或は宗敎を有つてゐると考へます」(文科)。

「信仰の有無は個人的自由だと思つて、それもその人の行き方だと思つて、別に非難をせず承認

してやります」（理科）。

不本意的。

「快くはありませんが、無神論を反駁する自信がありませんから仕方なく承認します」（理科）。

「無神論にも一面の眞理があると思ひますから不快ではありますが認めざるを得ません」（文科）。

憐憫的。

「一應承認しますがその愚を憐みます」（文科）。

「承認してやりますがほんとうに氣の毒に思ひます」（理科）。

條件的。

「もし彼がそれでほんとうに安心して生活して行けるならば、それ以上彼に信仰を强ひません」（文科）。

達觀的（或は洞察的）。

「一應靜かに承認してやります。と申しますのはどんなに無神論を唱へてゐる人でも必ずその非を悟り、信仰せざるを得なくなる時が來ることを信じてゐますから」（文科）。

「勿論快く承認します。その人は智識に溺れて先が見えないだけですから」（理科）。

「承認します。然し彼も自覺せぬ神を必ず有つてゐます」（理科）。

その他「他人の主觀に入るを好まず」「快といふよりは面白いと思ふ」等の說明が現れてゐる。

次に不承認說をまた積極的と消極的とに分けて見ることとする。

積極的不承認。この中にも比較的感情的なものと比較的理性的のものとがある。

「斷然承認することは出來ない」（文科）。

「絕對に承認出來ません。無神論は人間といふものを半分しか知らぬ無智蒙昧なる人間の吐く論です」（理科）。

「人間力を至上なりと信ずる增上慢として絕對に許し得ない」（理科）。

「意見を闘はせて之を論駁しなければやまない」（文科）。

「限りない反感を抱く」（文科）。

消極的不承認。これも種々の類型を含んでゐる。

輕蔑的。

「無神論を稱へる人は眞に思索せざる人としてて蔑視する」（文科）。「出來ません。私は彼を傲な利己的な奴として輕蔑します」（文科）。

慢憐愍的。

「無神論は甚だしい欺瞞だと思ひます。よくかやうな人を強い性格と申しますが、甚だしい誤謬で憐むべき弱き輩です」（理科）。

「片寄れる科學者として寧ろ氣の毒に思ふ」（理科）。「其愚をあはれむ」（文科）。

寛容的。

「快くは承認出來ないが、無神論を一應耳に入れる雅量あり」（理科）。

「承認出來ないが、どうしても無神論だといふものにはいはせて置く」（文科）。

「快くではないが、その氣持は十分理解出來ます」（理科）。「あまりよい感じではないが、強ひて反對する程でもない」（文科）。

無關心的。

「承認出來ない。といつて無理に信仰を說かふとも思はぬ」（文科）。「自分が神佛を信ずるからといつて、無神論者を是正し或は信仰を強要しようとは思ひません」（理科）。

以上の他「承認出來ないが、神がかりも承認出來ない」「無神論は無神論といふものを信じてゐるから同じである」「出來かねる。いま自分は無神論を論駁する論理を考へてゐる」等の考が現れ

てゐる。

「批判しての上で」には次の如き例がある。

「自分の神がはつきりしてゐませんから、その人の論に負けるかも知れませんが、批判した上で承認か不承認かを決定します」（理科）。

「無關心」には「この人はさう考へてゐるのだなあと思ふだけで快不快、承認、否認の感想を有たない」（理科）の如き例がある。

筆者は嘗て「青年學生の交友關係の構造」を調査したことがある（その結果の概略は之を日本心理學會第八回大會に於て發表したが、何れ詳細に發表するつもりである）。該調査の一項に於て筆者は十個の「親友の條件」を與へて品等を求めたのであるが、その結果、（一）性格（二）趣味（三）智能（四）思想（五）健康狀態（六）家庭の狀況（七）年齡（八）外貌（九）宗教的信仰（一〇）職業の順位となり、宗教的信仰は第九位であつた、即ち宗教的信仰の有無は如上十個の親友の條件の間に在りては重要な意味を有たない事が分る。併し本調査に於ては、たゞ「あなたは他人の無神論を……」として「他人」を特に規定しなかつた。從つて「他人」が各被驗者自體と如何なる關係に在る人と解されたかは不明である。

却説本調査の結果に從へば、第十二表の如く自ら信仰を有するものにして、他人の無神論を承認する者は文理科何れに於ても二一%であるが、説明を附しある者から判斷すれば（數量的には擧げて置かなかつた）、積極的承認者よりも消極的承認者の方が多かつた。而して他人の無神論を承認せざる者は、文科に五七%、理科に五三%ありて共に五〇%を超過してゐるが、また説明を附しある者から判斷すれば、積極的不承認者よりも消極的不承認の方が多かつたのである。以上の事實に加へて「批判した上で」決定するとなす者及び無關心者の説明に基いて全般的に考察すると、他人の無神論に對する積極的（或は絶對的）承認者と積極的（或は絶對的）不承認者は共にそれ程多くはないやうである。これは無神論者に對しては飽く迄之を説得せざれば已まざる熱烈なる態度をとるよりは、寧ろ妥協的態度を以て望むことを意味するのである。而してこの意味は前述の交友關係の調査に於て宗教的信仰の有無が親友の條件として重要視されてゐないといふ結果と略一致するやうに思はれる。

五　結果の總括

以上を以て青年學生の宗教調査の一部に關する一通りの記述を終つた。筆者は更に各方面の被驗

者に就いて資料を蒐めた上で本問題を吟味する計畫を立ててゐるので、本調査の結果は云はゞ一素材であるに過ぎない。從つて各項の夫々の結果に就いても立入つた解釋を避けたのであるが、いまそれを總括すれば次の如くである。

（一）神佛の存在を信ずるとなす者が絶對多數を占めてはゐるが、不信及び半信半疑となす者も可なり存在してゐる（第一表參照）。但し半信半疑となす者の中には勿論、不信となす者の中にすら、仔細に檢討すれば結局現實的生活に於ては何等かの信仰或は信仰に入る可能性を有つ者があるやうである。それは第六表の不信の理由並に第一項の質問に「否」の解答をなしつゝ猶第三項の質問に解答を與へてゐる被驗者の存在（第七、第九、第十、第十一、第十二の各表の實數の和と第一表中の「信」の實數參照）とによつて十分認められる。從つて絶對に信仰を有せざる者は案外少ないのではなからうか。既に諸研究者によつて指摘されてゐる如く、この種の問題に對して質問紙法がいさゝか不十分であることは、また已むを得ない。

（二）家庭の職業と神佛の存在に對する態度との關係に就いて見れば、專門學を職とする家庭に於て信ずる者の率が最も高く、家庭の職業を答へざる者を除けば官公吏及び會社員の家庭に於て最も低く、而して信せざる者の率は猶家庭の職業を答へざる者を除けば官公吏及び會社員の家庭に於

て最も高く、商業及び工業、無職の家庭に於て最も低い（第二表參照）。

（三）家庭の宗教と神佛の存在に對する態度との關係を見ると、佛教信仰の家庭に於て信ずる者の率が最も高く、キリスト教信仰の家庭に於て最も低い。而して信ぜざる者の率はキリスト教信仰の家庭に於て最も高く、半信半疑者の率は神道信仰の家庭に於て最も高い、但しキリスト教及び神道信仰の家庭の實數は佛教信仰の家庭の實數に比して甚だしく少ないので、この結果を重視することは困難であらう（第三表參照）。

（四）被驗者の永住地と神佛の存在に對する態度との關係を見ると、信ずる者の率は九州、四國に於て最も高く、北海道、奥羽に於て最も低い。而して信ぜざる者の率はまさしくその逆である。但し其の實數は兩者に於て比較的僅少であるので、之を代表的ならしむることは困難であらう（第四表參照）。

（五）被驗者の健康狀態と神佛の存在に對する態度との間には深い關係が認められないやうである。たゞ丙に於ては信ずる者の率が可なり低く、信ぜざる者の率が高いが、その實數が極めて僅少であるので、之を重視することは出來ないであらう（第五表參照）。

（六）神佛の存在不信の主なる理由は、神佛の存在は理性の要請特に自然科學的知識と矛盾する

といふ點に在りとされてゐる。然し「靈驗を感じたることなきが故」にとか「信ずる必要を認めざるが故に」等の理由も擧げられてゐる。又少數ではあるが「煩悶を有せざるが故に」となす被驗者もゐる（第六表參照）。

（七）神佛の存在に對し半信半疑の態度をとる者は比較的少數（第一表參照）であり、而してその主なる理由は自我の發見、獨立の主張及び理性の覺醒に在るやうである（結果第四中の代表例參照）。

（八）信仰の對象としては日本傳來の神と其他のもの（佛教關係、キリスト教關係、二箇の對象を除いた信仰對象）が多い（第八表參照）。而して日本傳來の神の中では皇祖及び現神に關し奉る者例へば天照大神、現神、天皇卽絕對者等が最も多く、其他の信仰對象の中では自己に關するもの例へば自己の心の中に在るもの、自己の信念並に祖先が最も多い。尙自然に關するもの例へば宇宙を統ぶる唯一絕對神、自然それ自體、自然の法則、更には運命、絕對的眞理等も信仰對象として擧げられてゐる。自己、自然の法則、絕對的眞理等が宗教的信仰の對象となり得るか否かは、神の概念が闡明された後に決定さるべきことではあるが、かゝる對象を信じ、それに限りなき尊崇の心情を捧ぐる青年學生のあることは事實である。

（九）信仰の動機を推理、體驗、教育、自然的感化及び其他の動機に分けて質ねた結果、推理及び自然的感化を動機として信仰するに至つたとなす者が多く、體驗によるとなす者は比較的少なかつた（第九表參照）。然し體驗の動機は感情的契機を含むことが多いので、極めて有力なるものと考へられる。まさしくこゝから宗教意識が展開して行くのではないであらうか。

（一〇）側面から信仰の理由を問ひ（質問第三項、dI參照）その理由を吟味すると、「理由ない。神」の如き絶對的信仰態度を持する被驗者も勿論あるが、何等かの願望充足の（功利的）理由から信仰してゐる被驗者の方が遙かに多い。但し功利的といつてもそれは純粹に精神的であるやうに思はれる（第十表及び説明參照）。

（一一）信仰に附與されてゐる意味或は價値としては利用價値（危機に陷つた場合の外的救濟者として神佛を信仰するが如き）と絶對的價値（神佛の存在を信ずることがすべての前提であるとなすが如き）と親としての價値（眠りに入る前、佛の像、母の像を瞼に浮べれば、ありがたい、安らかな感じに滿されるとなすが如き）が認められるやうに思はれる。而して眞正なる宗教的信仰態度としては後の二者であり、筆者の被驗者に於ては最後の態度が最も多く現れた（第十一表及び説明參照）。

（一二）機會ある毎に神佛に禮拜（祈禱）するとなす者が絶對多數を占め（第十二表參照）、禮拜（祈禱）せざる者の理由は、禮拜（祈禱）的行動の中に信仰の非本質性、羞恥性、無效果性等に存することが認められ、禮拜（祈禱）する動機としては、「自發的」となす者が最も多く而して神佛を禮拜（祈禱）する際には心の中に何かを求むる（但し精神的）態度の人と何をも求めざる態度との人が相半ばするかの如くである。

（一三）自らは信仰を有しつゝ他人の無神論に對しては如何なる態度をとるかを全體的に吟味すると、積極的承認者と積極的不承認者とは共にあまり多くはないやうである。これは結局他人の無神論に對しては寧ろ妥協的であることを意味するのである。

（一四）以上の諸問題に於て文科と理科とを比較する時、よし個々の問題に於ては多少の差異ありとするも、全體的には略相等しき傾向が認められる。これは恐らく文理科夫々の傾向が未だ強く分化してゐないことに起因してゐるのではなからうか。

この機會に科學的良心を以て本調査に協力を惜まれなかつた學生諸君に厚く感謝の意を表する。